

## 単独行向きの人と向きでない人

『山と溪谷』誌今月(2018年2月)号の特集は、「単独行レベルアップ術」である。「単独行レベルアップ術」とおおきな文字で印刷されている表紙には、「ひとりで山と向き合い、独力で登山を完結させる。単独行こそ山からもっと学べる」と赤文字で惹句が刷り込まれている。

目次を見ると、最初に「単独で登る理由」がインタビュー記事で紹介され、次に「単独行を知る」という解説があつて、単独行の遭難は重大化しやすいというリスクがあること、単独行の不安やリスクを軽減する方法が述べられている。続いて「計画」「装備」「行動」「リスク管理」など、単独行レベルアップ術が述べられている。各項目の間には、単独行へのインタビュー記事が紹介されていて、単独行への共感を呼ぶようになっている。

単独行のリスクが大きいことは論を待たず、「単独行はやめよう」というのが登山界の基本的な考え方である。今回の特集記事は、不安やリスクの実際を挙げ、リスク管理を具体的にQ&A式で紹介しているとはいえ、「単独行のススメ」にほかならない。登山のリーディングマガジンともいふべき『山と溪谷』誌が、これでいいのだろうか？

さてぼく自身、単独行についてどう思っているかということ、ホンネでいえば「是」である。立場上タテマエでは「単独行はやめましょう」で、どこの登山教室でも「単独行はリスクが大きいからやめよう」と指導している。親しい山仲間の一人が安達太良山から下山していたときのこと、諸般の事情で単独行だった。ウィークデーの夕方近く、ポピュラーな山なのに前後に人影がなかった。彼は石車に乗り、転倒して足首を骨折。携帯電話もなかった時代でSOS発信のしようがなく、その場でビバーク、翌朝登ってきた登山者に助けられたということだ。「雨に降られなかったのが、不幸中の幸いでしたよ」と、ぼやいていた。

ことほど左様に単独行はリスクが大きい。先の具体例を紹介し、「単独行はやめましょう」と、レクチャーを締めくくると、すかさず質問が飛んでくる。「自分は休みが不規則で、同行者を得にくい。やむを得ず一人で山に登ることが多いんですが、まずいですか」、ぼくは小さな声で「いいんじゃない」と返事をする。

確信犯ならいいんじゃないか、とぼくは考えている。単独行はリスクが大きいことから、単独行を勧めるような特集記事には疑問を感じるのだ。単独行をやってみようなんて考えたこともなかった登山者が、その特集記事に触発されて単独行をはじめたかもしれない、そんな危惧を感じる。じゃなくて、「単独行向きの人と向きでない人」という特集なんていかなものか、と思ったりする。気の短い人は不向きとか、寂しがり屋はダメとか、そんな特集記事で、「単独行はやめ」と考える人が増えたら面白い。自分はけっこう単独行をやっていたのに…。